

講師

沖縄県がん患者会連合会

目彰彦

黒島富士子

安里香代子

### ① がんについて

「2人に1人ががんになる時代」ということを初めて知りました。自分の親せきとか家族、従妹などの身近な人にがんの人はいないので、「がん」という病気はずっと特別なものと思っていたが、今日の授業を受けて「死」がとても身近に感じた。絶対に不安で怖いはずなのに、ハキハキと希望を持って生きているように見えた。今までの固定観念が覆された気がしてとても驚いた。今日の授業がなかったら、分からなかったことも沢山あり、いろんな事をしっかり吸収して行こうと思った。

### ② 命の大切さ

自分は今、特に病気もしていないし、毎日健康に生きられているから、自分が死ぬことなど考えたことがなかった。しかし、今日「死」に直面したがん患者さんの話を聞いて、今、自分が健康に生きられていることは当たり前ではないことに気が付いた。自分を生んでくれた親や、自分を大切に思ってくれている人たちのためにも精一杯生きたいと思った。

### ③ デス エデュケーション がん教育

今までは、がん患者やその家族が率としてこんなに居るということを知らなかった。「余命」とか聞くと誰でも怖くて不安になってしまうだろうけど、今日話して下さった皆さんは「命は誰でも限りあるものだから」という考え方、心の持ち方をしていて豊かな人生を過ごそうと生き生きしていた。これから生きていく中で、私も患者さんや家族に出会ったりする可能性がとてもあることが分かった。目さんがおっしゃっていた「患者はがんに対して、ちゃんと受け止めていて逃げない。周りが気にしすぎている。ぜひ仲間になって、向き合ってほしい」セラピストの方のタッチ(触れる)のことなど、とても大切であり、実行することは難しいことでもあると感じた。

### ④ がん教育

がんになった方が身内にも、友人たちにもいないため、今日の話聞いて緊張した。後遺症や辛かった思いや気持ちを抱えていらっしやりながらも、様々な人と支えあって、皆さん前向きに、生きているのだと話を聞いていてそう感じた。目さんが「がんになる人の90%以上はタバコとお酒が好き」と話していて、誰にでも本当に可能性があり、身近にあるものだと感じた。「がんばれよ」ではなく、話し合い寄り添い、支えあっていく姿勢が少しでも不安になった心を軽減する、させることになるのだと思った。

### ⑤ 生きる力とは？

私も同じがん患者であるが、生きられないかもしれないという不安を覚えた時に、一番感じたことは

「生きたい！」ということだ。「子供が欲しい」「もっとたくさん映画を見たい」「きれいな人と結婚したい」その気持ちが「まだ死ねない。やり残したことがあるから」という生への渴望にへと繋がった。だから普通に一日一日を過ごしている。大学生活にも生きる意味を見出し、夢を持っていたい。死ぬときに人生にやり残したことはないと思われたいように、力強く希望を持って生きていきたい。

#### ⑥講話に来て頂いて

まず、「話辛いこともあったと思いますが、今回私たちのために講話にきて頂き、有難うございました」と伝えたいです。今回「がん」について知ったことも沢山ありましたが、今日の講話のみを聴いて、「がんについて知った」と軽く言うことは出来ないなと思いました。私も病気の時などは、気持ちの問題だと思いがちだったけれど、その精神論では終われない 身体のケアを大切にしていかななくてはと思ったし、将来、生徒に寄り添うことを大切にしていかなければならないと感じました。

今日の講話で感じたことをすぐに言葉にすることは難しいけれど、子供たちに将来「がん教育」を行う時にも、何かを感じてもらえたり、正しい 知識を伝えていけるようにしたいなと思いました。

#### ⑦命を大切に

目さんの、がん患者に「頑張れ」と言うのではなく、寄り添って「聞いてあげて」と言う言葉が心に残っています。がんに罹患した人が周りにあまりいないため、今日の授業を聞くことができ本当に良かったです。自分のお爺ちゃんもがんを治し、今も元気にはしていますが、おばあちゃんはがんで亡くなっています。自分もいつかは亡くなる時が来ます。今という時間、何をしたいのか、すべきなのか、全力で今を生きていきたいと思います。

#### ⑧思春期と向き合う実践教育

本日の講義で死に対して、怖い、辛い、苦しいという話を聞いて、死に対して日頃自分は考えていないと改めて気づきました。いろいろな方から色々な話があって、人は誰かと支えあって生きていくし、助けがないと頑張れないなと思いました。安里さんがおっしゃっていた「凝縮された人の生きていたことを見つけ出すのは自分たち」「心の傷を抱えている子はたくさんいる」という言葉が印象に残り、小学校の現場で子供たちの心と体の痛みをくみ取ることができる教師でありたいと考えます。痛みや苦しみを実際に感じている人にはなれないけど、その人の救いや支えになり、めげずに生きていきたいです。

#### ⑨命の授業

がん患者さんや患者さんのご家族が集まって一つの会が結成されたり、存在することは知っていたけれど、こうして直接講演を聞くのは初めてだったので、とても考えるところがありました。

話を聞かせて貰って、3人とも共通して言っていたことは不安ということです。自分は身近にがん患者さんがいないので、正直想像したり考えたりすることがなかったです。聞くうちに想像の中で感情移入してしまっただけで、自分の家族、友人、彼氏の顔が出てきて、話して下さった3人だけでなく、他のがん患者さんやそのご家族の訴えが聞こえてくる気がしました。他人事ではなく自分のこととして、もっと知りたいと言う気持ちが増大してきました。

#### ⑩特別活動の中でのがん教育

今日は3人のゲストスピーカーの方からお話を聞くことができた。最初は喉頭がんを経験した目さん。自身の体験を語っていたが、次の黒島さんの話を踏まえても、想像よりずっと大変なんだろうと思った。現在2人に1人はがんになり、3人に1人はがんで亡くなると言われる中、決して他人ごとではないと感じた。遺族という立場から安里さんの話も聞いたが、ともに戦う人だから味わう辛さ、大変さも知った。そして3人のスピーカーの方の話から、今日共通して学んだのは、「命の重さ、大切さ」がんという病気は「死」に近いので、デリケートなことであるために避けられがちではあるが、そこにある「生」「命」に目を背けずに学んでいくべきだと思った。

#### ⑪生と向き合う。死と向き合う。

今日、お話をしに来て下さった3人の講師の方のお話から、「生」や「死」に向き合うことの大切さを学びました。自分が今生きていることもそうですが、五体満足で不自由なく日常生活を送れていることがすべての人にとって、当たり前であるとは限らないと感じます。私の父親はくも膜下出血で倒れ、脳の後遺症で、まだ50代ですが、老人ホームでほぼ寝たきりの生活をしています。働いていたころに比べ、味気のない日々を過ごしていると思いますが、それでも会いに行った時は、笑顔を見せてくれ、それが私や家族の心の支えにもなっています。がんやその他の病気は勿論、健康に生きている人でも老いによって必ず死んでしまうし、私自身にもいつかは死が待っていることを忘れず、悔いのない生き方をしたいと感じさせられました。

#### ⑫死と向き合っていく

今日はがん患者とがん患者遺族の方からお話を聞くことができました。今まで「喉頭がんは」、その手術することで声を失うと思っていましたが、実際は声を失うだけでなく、味覚や匂い力さえも失うという事を知りました。また、がんは患者だけでなくその家族や身内も辛い気持ちになることを知りました。自分がいつまで生きられるか判らないので、周りの人に対して何を残せるか考えようと思いました。

#### ⑬「死」との向き合い方

今日の講義を通して「がん」という病が2人に1人は発病し、3人1人は「がん」で亡くなるという事を初めて知った。自分自身、祖父と祖母の両方をがんで亡くしているのですが、その時、自分は何を言ったら良いのか分からなくて、傍にいないことしかできませんでした。又、もっとしゃべっておけば良かった。

ったとか、ほんとにいろいろな後悔をして、悔やんでも悔やみきれませんでした。でも祖父、祖母の気持ち考えた時に、このままじゃだめだと思ったし、その時に抱えていた悩みなんか本当にちっぽけで、いつまでもそれに引きずられず、逆に頑張ろうと思うことができました。これから先何が起きるか分からないけど、楽しんで生きていこうと思います。

#### ⑭がん患者の話し

私は言語学の授業で、調音や発声の仕方を習っているのですが、咽頭がんの方が咽頭を摘出した際に、どう発声しているのか？すごく興味を持ちました。友声会に所属し、発声を身につけながらも、短気になったり、匂いや味覚を失い、それでも生きてきた強さはどこからきているのでしょうか？また、同じように日光すら痛くて、不安な日々を過ごし続けたり、家族を失ったりと辛い日々の中でもどのように生きることをやめないでいられたのでしょうか？私は小さいことで、不安になってしまうので、「がん」という病気にかかっても尚強く生き続けるイメージが湧きません。しかし、「死んだ方が楽かも知れない」と思いながらも、こうして講演をしたり、能動的な生き方をしている根源とは何なのか気になりました。教育でできることとは？精神、社会、身体の苦痛の分かち合いに寄り添う事。それをするために自身のマインドを強くする事が必要だと思った。

#### ⑮生きる強さ

目さんの声を、自己紹介の際に聴いた時にすごく驚きました。咽頭がんで話すことが出来なくなったはずなのに、気管食道シャント発声法で話そうと思い、手術後も努力したという勇気に感動しました。カラオケで歌うことが好きだったというような話もありましたが、自分の声のギャップ、違和感などを受け入れる目さんの生きる強さを感じました。黒島さんは、乳がんで胸を失ったことにより、女性としての自信や自分の個性、さまざまなものを同時に失ってしまったし、その恐怖は計り知れないと思いました。性の授業でもあったように、女性だけがかかる病気ではないこと、「がん」という病気が他人事ではないことを改めて認識しなければならないと思いました。がん患者の方々が、話し思い出すことも辛いのはずなのに、こういった活動をしていく皆さんの力強さを感じ尊敬します。終始自分の過去を重ねて目頭が熱くなり、正直聞くのがつらく胸が痛かったです。

#### ⑯命の授業（感想）

今日はがん患者の方が講義をしてくれた。自分も中学の時、脊髄腫瘍にかかり入院したことがあった。その時にがんの方を多く見かけたが、「がんの方たちは寝たきり」みたいな偏見を持ってしまった。今日の講義でがんになった人も、他の人より少し不自由なことがあっても、普通の生活を送ることが出来ると知って、自分の知識の無さが悔しかった。自分の体験も、もしかしたら教育で生かせる機会があるかも知れない。そうなりたかった。

#### ⑰「がん」について

目さんの話を聞いて、身体を動かすたびに「死ぬかもしれない」と思う子供時代の記憶は自分には想像できない辛さがあったらと思います。また「手術によって話すことは出来ないが、がんが治る」「手術なしでは、話せるけど死ぬ。」という2つの選択肢を迫られるのも辛かったらと思います。でも今、前を向いて生きているのが、とてもかっこ良いと思いました。自分は去年の10月に祖母を肺がんで亡くし、地元が愛知県という事もあり、あまり話をする事もできなかつたし、もっと深く関わる事が出来たのではないかという後悔がすごくありました。でも今日のお話を聞いて、いつまでもネガティブデいるのは良くない、前を向くべきだという思いになることが出来ました。

#### ⑩がん教育について

今回は沖縄県内がん患者会の方に来てもらい、お話を聞くことが出来ました。一人目の方は声帯をなくしたにも関わらず、自分の力でお話ができるようになっていてすごいと思いました。黒島さんは乳がんという事で一番身近に感じる「がん」でした。安里さんのがん患者の遺族としてのお話を聞いて、自分の周りにがんになった方がいる時の事も考えることが出来ました。私も実際に祖父を肺がんで亡くしました。母も4人姉妹なのですが、全員がんを発症しています。やっぱり、今日ではがんになることは珍しくないし、私もがんになる確率はあります。そういった事実を改めて感じました。この講演会を通して改めて自分の生き方も見直そうと感じます。

#### ⑨がん教育

今日の活動はがん患者さんのお話を聞くことでした。がんになっても自分でできることに挑戦し、明るく生活できる等の気持ちを持っている皆さんは強いなと思いました。また、私は身近にがんになった方がいるので、気持ちが入って話に聞き入ってしまいました。パートナーをがんで亡くした方のお話はとても心に響きました。話を聞いてあげるだけでも違うし、日常の会話をする事も、とても大切であることを学びました。これから、自分がどのような立場になるか分からないけど、明るく生きていこうと思いました。

#### ⑩がんサバイバーの話

今回の授業の話を聞いて、闘病生活は病気になった人だけに使う言葉というイメージがあったけど、実際に話を聞いたら、闘病生活は病気になった人の周りの家族や友人なども一緒に戦っているんだと思った。目さんの話で、短期になりやすいと言っていて、話しが相手に伝わらないというのは今の自分も体験したことがあるけど、それと比べられないくらい大変なことだと思った。

#### □がん教育

今回、三名の方から話を聞いて、がんについて深く考える機会になった。当時のつらい気持ち、死と向かい合わなければいけない状況に置かれた時のことについて話されていて、自分もがんになる可能性はあるのだし、そのような時に、本当に病気と向き合うことが出来るのか考えた。趣味のカラオケが出来なくなったりする中で、自分の経験を伝えてくれたり、仲間と楽しんだりしている彼らをすごいと

思った。私たちも普段から死と隣り合わせであり、一日一日を大事にしなければいけないことを再確認できた。

#### □ death education

今日の講義では、いろいろと自分の経験と重なる部分がありました。私は中学校2年生の頃にクラスメートを肺炎で亡くし、自分にも明日がやってくる確証もないし、自分の周りの人もそうだと思います。 「がん」という一般的に見て「死」に近い病気になった方々のお話を聞くと、改めて今日という一日を大切に生きていかなければならないと感じました。また、私は右耳が聴こえず、左耳の聴力も低下していて、いつ耳が機能しなくなるのか分からない不安な状況で過ごしているので、いつ何が起ころうとも後悔しないように日々、日常を大切に過ごしていこうと思います。

#### □特別活動の中でのdeath education

初めにお話しして下さった目彰彦さんは気管食道シャント発声法という声の出し方でお話しして下さっていて今回初めてその発声法での生の声を聴くことが出来ました。一言一言とても心に響いて丁寧に発して下さっている姿がとても印象的でした。次の黒島さんのお話しの中で、同じ体験をした人と話をすることで、気持ちの整理がついたり、前向きになれたりするという言葉があり、気持ちを共有しあえるようなコミュニティの大切さを知ることが出来ました。自分らしく生き活きと活動を行っている姿もとても印象的でした。安里さんのお話しの中で、遺族や患者を支える家族同士でもコミュニティを作り、苦しみ、悩みを共有することの大切さを知りました。今、私の身近にも病と闘っている人がいます。その人の気持ちに寄り添い、一緒に病気と向き合う姿勢を大切にしていきたいと心から思いました。とても貴重なお話を聞いてよかったです。

#### □沖縄県がん患者会連合会の皆さんのメッセージ

目さんが初めて声を出した時にまずとてもびっくりしました。ただ普通に声が低くてガサガサなのではなく、声帯がないのを知った時、がんの怖さを感じました。何かを失ってでも生きたいという覚悟を決めるのも、周りの人のことを考えるのも辛かったんだろうなと思いました。2人に1人ががんになるというのは自分にも当てはまるので、少し怖くなりました。改めて検診も行かないといけないなと思います。もし自分ががんになったら～と考えると、今この講義を聞いている事も、普通に学校に通い普通に生活できているのも幸せ以外の何物でもないと思いました。今、嫌だな、やりたくないなと思っていることも小さく思えたり、頑張ろうと思いました。

#### □本日の講義と自身の経験

私自身、親戚の大好きな人を「がん」や ALS等の病で亡くしています。いつも会いに行くと明るく振舞ってくれて、大丈夫そうかなと安心する一方で、やっぱり大変な思いをしているのにも関わらず、「私のこと」を思って対応してくれているのだと思うと、とても切なくなりました。しかしこういう病

気になったにしても、亡くなった親戚は優しさや温かさ、幸せを分かち与えられる人だったことに気が付いた時、大きな人間性を持った人だったんだと思いました。本日の講義でお話しされていた目さんや黒島さんは苦しい中であって、自分には何ができるかを考え、尽くされている方たちだと思います。人に何をしてあげらるか、いかなる状況でも誰かに何かができることを考える人は何時でも幸せだと思います。教育にもその根っこは繋がっていると思います。きちんと向き合う人間になりたいと思います。

#### □「生」の有限性と尊さ

今回、実際がんと闘っている方の体験談を伺った。私自身は死に対しての漠然とした不安感を抱きつつも、それに対して良く考えたことはあまりなかった。しかし、今回死に直面し、苦しんだ人々のお話を聞いて、今、何ら困難なく呼吸し、食事をし、話をすると書いた当たり前の日常生活を送っている、生きていることが、どれほど奇跡的で幸福なことなのか、改めて気づくことが出来た。「死」という一見「生きる」こととは正反対の事柄を真正面から見据え、私たちとはまた違った「生」のビジョンを引き継いでいく意思を抱くことで、生きることの尊さに触れられた気がした。

#### □特別活動～death education～

"がん"という病気は誰もがなりうる病気である。今、日本人が一番かかる病気であるという事も知っていたが、本講を受講してとても身近な病気であることを本当に実感しました。もし自分が"がん"になったら、もし自分の周りの人が"がん"になったら、私は何を考え、その人たちに何ができるでしょう？とても考えさせられました。これから、教育に携わるようになるという事で、誰かの笑顔の意味になれるように、いつ終わるか分からない人生、今を全力で生きていこうと思いました。本日来てくださった皆様には感謝でいっぱいです。本日はどうも有難うございました。

#### □当たり前に感謝する

当たり前に生きられることが、健康であるという事が、どれだけ素晴らしいことなのか、どれだけ感謝しなければいけないことなのか、改めて実感しました。気軽に「死にたい」や「死ね」と言う人もいますが、そういう人にその言葉の重さについて気付いてもらうためにも、こういった講話を聞くことは有効なのではないかと思いました。私が教師になった時にも特活の授業でこういった講話を取り入れて行きたいと思います。阿波連さんの「教育と医療は似ています。どちらも人の生のバトンを繋ぐ仕事だから」と言う言葉はとても心に響きました。先生という仕事をやるからには、人生をかけて全うして行きたいと思いました。

#### □デス エドュケーション

今日はがん患者さんのお話を聞いた。目さんのお話で、「タバコ、お酒の取りすぎで96,5%の方がこのような方である」と聞いて、やはりタバコとお酒は良くないんだなと強く思われました。黒島さんのお話では、がんになって、抗がん剤投与のために髪が抜けたり、乳がんなので全摘出など、女性にとっては、とても辛いことをたくさん乗り越えていらっしやって、周りの支えと強い心が大切だと思いました。香代子さんのお話でパートナーを失くす辛さを語って頂き、闘病生活をどうその人と向き合っていくかについて考えさせられました。その人の心に寄り添い、支えて行けるような人になりたいなと思いました。

## □がん教育

私の祖父は私の幼いころ、がんで亡くなったそうです。母から聞いた話では、手術をしても成功するか分からないけれど、少しでも治る可能性があるのならと、家族の反対を押し切って手術をしたそうです。手術は失敗して祖父は亡くなってしまい、母はとても後悔したそうです。手術をして完治はしなくても闘病しながら生きていける人もいれば、手術をして早く亡くなる人もいますので、手術をするか、しないのかとても悩むと思います。どちらを選んだとしても、後悔しない生き方をしたいと思います。

## □「がん」

がんという病気は今まで、治らないもの、辛いものというマイナスなことを思い浮かべていました。「がん」の患者さんは、「がん」について触れられたくない。「がん」の患者さんで、辛い人生を楽しもうと行動していけるのは、テレビなどで取り上げられる一部の人のみだと思っていました。しかし、がん患者の目さん、黒島さん、そして安里さんの話から「がん」の捉え方、「死」の捉え方が私とは大きく違う。「がん」を受け止め、「死」から逃げずに考えている。先生が言うように「死」は誰にでも来る。その「死」という存在を受け止め、その先の「生」、人生について考えることが大切だと分かった。この考えは人生を豊かにすると思う。

## □命について

今の時代、二人に一人ががんになり、三人に一人ががんで亡くなるという事を聞き、「がん」という病気が身近にあるものだと感じました。私自身ががんになる可能性もあるし、家族ががんになるかもしれないという事を考えるきっかけになりました。人は必ず死ぬものであるけど、「がん」になると余命を宣告され、人生の期限を知ることになり、常に死に追われてしまい、恐怖なのではないかと思うのですが、今回お話をしてくれた患者さん二人は、死というより生と向き合ってる感じがして、勇気を貰いました。

## □デス エドュケーション

がんを患った人は自分お近くにもいる。小さながんではあるが、それでも「がん」は「がん」だ。とても心配であると思っていたが、自分より元気で生きることには希望を見い出せている。そういうのを見ていると、病気であっても、生きることには望みを抱いている人こそが幸せになるのかと思います。

## □がんと向き合うとは！

がんは突然発症していると思っていた。いつ何時、それに気付けるのが、運命の分かれ目だなと思った。「私はまだ若い」と思っているので、健康診断のお知らせが届いても「大丈夫かな！」と思って関心を持っていなかった。最近子宮頸がんの検診に行ってみた。それも自分の意志ではなく、母の勧めでの検診だった。幸いにも異常は見つからなかったが、すごく痛いと思ったので、次又行くかと考えた時、気持ちが進まないなと思った。しかし、今回の講演を聴いて、絶対に行くべきだなと感じた。沢山の苦勞の中で、沢山の努力をしている姿が垣間見られた。がんになったときは、最初は本当に落ち込んでいて、「死にたい」とか思っていたように感じたが、その中でも希望を見つけ、楽しく生き活きと暮らしている姿にすごく胸を打たれた。

## □命について考える

がん患者さんたちは私の感じたことのないほどの絶望や苦勞を味わってきたという事を身に染みて感じた。ゲストの皆さんは、みんな明るく、元気で病気だと感じさせないほどだった。「元気を貰いに来た」と始めに話していたのに、私たちの方が元気を貰えたと思った。治療の苦しみや再発の恐怖を味わったことが無いが、もし自分なら乗り越えられるかどうか分からない。ゲストの皆さんを尊敬する気持ちになった。授業や課題に追われる毎日で苦しいと感じることも多いが、死は意外と身近なもので、今をもっと大切にしなければいけないと思った。今日を精一杯生きて、いつ死んでもやり残したことはないと言えるくらい、一瞬一瞬を楽しんで行こうと思う。大学に入って最も心に響く授業を受けられて本当に良かった。

## □命～がん教育(デス エドュケーション)

がん教育(デス エドュケーション)について知る機会や、がんになった人から詳しい話を聞くことがあまりなかったので、今日の講義で初めて知ることや驚くことが沢山ありました。そして目さんと黒島さんはお二人とも今を大切に元気に生きていて、すごく尊敬できると思いました。咽頭がんで声を失ってしまい、とても辛い日々を過ごしたのではないかと、そして第二の声を取り戻すのには、相当努力されたのだろうと想像できます。がんを乗り越えるためには周りからのサポートが欠かせない。遺族の方が話していたお互いに寄り添う、思いやりを持つ、相手の立場に立って考えることを日々教育の中で取り入れ、また黒島さんの「もしがんになったらどうする？」という問いを学校のみんなで考えていける授業をしてみたいです。とても勉強になりました。

## □がんと向き合う

今までは、がんと聞いても、「まだ若いから関係ない」と考えることが多かったけど、現在二人に一人ががんになるという事を聞いて、考え直さなければいけないと思った。自分が「がん」になるかも知れないし、身内や知人ががん」となるという事が必ずあるだろうと思う。その時に自分に何が出来るの

かを考えていこうと思う。これを「がんの」ことだけに限らず、誰にでも訪れる「死」と言うことも意識して生きていこうと思った。

#### □がん患者さんの体験を聞いて

今回の講義で4人の方の話聞いて、がん患者やその家族の方々の苦悩や大変さなどへの理解が深まりました。やはり、当事者の方々にしか分からない痛みや恐怖などの感情があり、完全に当事者の心が分かるわけではないですが、その中でもどうしたら一緒に乗り越えられるか、どれだけ寄り添うことが出来るか、そういうのが大事だと思いました。もし、身近に当事者が現れた時に、そういうことを考えながら、動けたら良いなと思いました。そして自身の命を大切にしながら、感謝の気持ちを忘れないで生きていきたいと思いました。

#### □偏った私の虚偽の無い想い

私は「生きる」と言うことは、虚偽の世界であると思っている。生きていることにレゾンデートルなどないし、突然、デウス=エクス=マキナに襲われることもままあるし、何かを紡いだとしても、死後は観察者である私が居ないので、それがどうなっていくかは知り得ない。(言ってしまうと、世界五分前理論すら否定できないので、世界は虚構かも知れない。)捻くれていると思われるかも知れないが、本当にそう思っているのだから仕方がない。只、それと同時に虚無であるからこそ人間の営みは美しいと思う。何かを残せる保証が無くとも、懸命に生きる様は美しい。散りゆく様子ですらも愛おしい。(破滅の美学とでも言おうか?)私はどのような花火を咲かせる事が出来るであろうか?願わくば話者らと同じくらい綺麗なものであって欲しい。

※レゾンデートル・・・自身が信じる生きる意味、存在価値

※デウス=エクス=マキナ・・・夢落ち、ドンデン返しのようなもの

#### □いのちの授業

母方の祖父が、ついこの間、肺がんと診断され、現在進行形で闘病中だ。だから余計に他人事としてではなく聞いていた。私の祖父は余命を言い渡されるほどまでは悪化していない段階で発見できたらしいが、それでも祖母、私の母のショック、そして祖父のショックは大きかった。私もとても大きなショックを受けた。だから余命宣告をされた黒島さんや喉頭がん摘出を余儀なくされた目さんはどれほどだったか、家族の方はどんな思いだったか、私が語れることではないくらいだと思う。でも、患者の方々は、悲しみや辛さを乗り越えて、生きることに希望を持って強く生きていらっしやった。村末先生もおっしゃったように、「皆に最後は来る。只その最後が病を通して先に知っただけ。知ってどう向き合うか」を話して下さった。その通りだなと思った。祖父にはあまり精神的に負けすぎないで弱りすぎないで、頑張ってもらいたいと思った。

#### □がん教育

がん教育(デス エドュケーション)なるものを今まで受けたことがあると思いますが、今回のようにがんを患った本人さんが講演して頂いたことはなかったかと思います。なので今いち、本当の辛さを共有することが出来なかったのですが、今日、当事者の言葉で話されることを目のあたりにすると、そのリアルな感情を受け取ったので、聞いている自分の心も苦しくなるものがありました。他の学生の感想で話していることと同じ考えを持っている自分もいて、今日の講義で価値観や見方が変わりました。二人に一人ががんになる世の中らしいので、自分自身も自分の身近な人にも患う前に予防を行っていきたいです。

## □がん教育

今日のお話を聞いて、健康で生きるとは、とても大切な素晴らしいことだと改めて感じました。がんを患って、辛い思いや経験をしたからこそ、今を大切に、前向きに生きていて、私も生きる力を貰いました。「がん」にこんなにも種類があることを初めて知りました。今日では二人に一人ががんになる可能性があることを知り、もっとがんを身近に考える必要があると思いました。この先、がんを患っている人に出会ったり、自分の家族が患ったとしても豊かに自分らしく生きていけることを伝え、支えながら一緒に乗り越えていけるような存在になりたいと思いました。

## □がん教育の講義を聞いて

今日の講師の方々のお話を聞いて感じる事が沢山ありました。まず、「がん」というものに対しての自分の知識が全くないことを感じました。身近なものという意識はあるが、具体的にどういうものが説明できないと思ったので、その知識も付けたいと思いました。「がん」としっかり向き合う姿勢を見て、捉え方は少し違うかも知れませんが、物事にちゃんと向き合い、諦めない姿にとっても感動しました。講師の方々のような素晴らしい話が、自分にできるかどうか分かりませんが、僕も今日聞いた話を一人でも多くの人に伝えたいと思いました。自分に出来ることをは小さなことだとしても行動にしてみたいと思いました。

## □がん患者さんの話を聞いて

目さんや黒島さんの話を聞いて、声を失っても、胸を失っても治療が苦しくても懸命に生きてこられていて、命の大切さを改めて強く感じました。黒島さんの言葉の通り、「つらく苦しいことを乗り越えた人は強い」と言うのを目さんや黒島さんがお話しされている姿からとても感じられました。また、安里さんのお話から、パートナーや自分のとても身近な人が亡くなるという事はとても辛いことだと思った。でもそれで終わりではなく、この辛さや悲しみを、どこに、どのような形で伝えていくか、共有していけるかが大切だと思いました。自分自身も、がんについてもっと知識をつけていきたいと思いました。